

【高校部門・中外日報社賞】

絵と私

市立札幌大谷高等学校 第3学年 高津 芽生

最後の高文連。私が絵で表現するテーマはもう決まっていた。それは、私は私の世界が無いということ。それは、私のアーティストとしての致命的な欠点だった。

「あなたの絵の良い所は細かく描き込んでいることだから、それをもっとやっていくといいよ。」去年、公募展の作品の制作中、アドバイスを求めた私に先生がそう言った。一見誉め言葉ととれる、いや、先生にとっては本当にそのつもりだったであろうこの言葉。私はその時感じた怒りにも似たショックを忘れられない。そんなことやろうと思えば誰でもできる、というのが本音であった。つまり先生は、私の絵の魅力はそれしかないのだとでも言いたいのかとも思った程だった。

しかし、人の目を気にして完璧を目指すうちに個性が無くなっていくということは、ずっと他の先生に指摘されてきたことだった。他人から見た私、それが世界の全てであり、周囲の目を気にして生きてきた結果が今の私なのだ。そんな欠点をテーマに描いているのだから、辛いことこの上なかった。

ところが、大会当日に展示された自分の作品を見たとき、私は辛かった制作過程を完全に忘れていたと思う。不安をよそに、その作品はあまりにも輝いているように見えた。後から考えると、自分の欠点を素直に受け止めて向き合ったことで、よりテーマに沿った強い作品ができたのだと思う。また、私のそのような欠点を知れたのは、絵を通してであったということにも気付かせてくれた。

私にとって絵とは、自分自身の心よりも分かりやすい私の中の「世界」かもしれない。これから辛いことがあったり悩んだりしたときは、逃げずに向き合いたいと思う。それが、視野を広げることに繋がり、私の「世界」をさらにおもしろくしてくれると信じている。